
異世界転生顛末記(仮)

いち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

異世界転生顛末記（仮）

【Nコード】

N7352X

【作者名】

いち

【あらすじ】

転生して、捨てられて、拾われて。

元日本人渡井智恵子がのんびり生きていくお話。

プロローグ(前書き)

異世界転生とほのぼの

プロローグ

ゆらゆらと揺れる世界で随分と長い間、微睡んでいたように思う。温かくて、ずっと誰かが守ってくれている。そんな絶対の安心感があつた。時々優しい声が聞こえて、何を言っているのかはわからなかつたけど、返事をするように動くとき喜ぶ様子が伝わってきて私も嬉しくなる。

そこは幸せな空間だった。

愛されていることを体全部で感じていられた。命を丸ごとあずけていられた。ずっとそこに居たかつた。

終わりは緩やかに訪れた。

優しくかつた世界が波打つて、私にもうじき終わりが来ることを知らせた。一回だけなら気のせいだと思つてもできた。しかし時間をおいてなんども訪れると、だんだんと不安になってくる。

(ここから追い出される?)

丸まつた体を締め付けるような脈動は回を追つごとに長く強くなつていく。

そしてその時は来た。

ぎゅうーつと頭を圧迫される感覚。どこか狭いところに押し込まれて、押し出される感覚。せつかく温かくて優しいところにいたのに、否応なしに私を追い出そうとしている。

(嫌だ。ここから出たら、始まっ……てしまう!!!)

そう思って、でもそれだけだった。突然のことに体は思い道理に動かせず、痛みで何も考えられなくなつて、抵抗らしい抵抗もできず、私は訳もわからないまま痛みから開放された。

(嫌だったのに。ずっとあそこにいたかつたのに!)

ただ感情だけが私の中にあつて、ほかのことなど何一つ考えられ無かつた。周りの人に何かされている間中みつともなく泣きわめき、重たい手足を振り回し、小さいからだに収まりきれない不満を爆発させた。そうすることしか出来なかつた。

この日、私は産まれた。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

小説をちゃんと書くのが久しぶりすぎてなかなか書けない・・・
o
r
z

誤字脱字報告やアドバイス、ご意見など頂けたら嬉しいです。

？前世へかこ」と現世へみらい」

自我が目覚めた、というか前世の記憶をはっきりと思い出したのは離乳食が始まった頃だった。スプーンに盛られた味の薄いグチャグチャしたものを口に含んでゆつくりと味わいながら、赤ちゃんってこんなもの食べて美味しいんだろうかと考えて、その時に気付いた。

あれ、なんで私は離乳食こんなものを人の手から食べているんだろう、と。

私は、渡井智恵子という人間はもうすぐ二十歳に成ろうかという専門学校生だったはずだ。もちろん食事は一人ですべていたし、わざわざ食べさせてもらうなんて無かった。急に蘇った記憶に、口に入っていることも忘れてぽかんとしてしまった。

当然、口からこぼした。

「うぶう」

グイグイと口元を拭われながら、急速に自分が置かれている状況を理解していくのがわかった。私は生まれ直した。いわゆる転生だ。渡井智恵子として死んだ記憶はない。この体として生まれた時のこともあまり覚えていない。わかるのは二十年近く渡井智恵子として過ごした記憶と、生まれてくる前の温かった絶対の安心感。

私の意識はそのままに、体と環境だけが変わってしまった。いや、生まれたばかりで自我の薄い赤ちゃんに、前世の私の思考が絶妙のバランスで交じり合って、こうなったのだろうと思う。体の感覚や感情は赤ちゃんらしく拙くて、あまり制御できていない。ちっちゃいもみじ手は何かを握ることにすら全力で行く。そしてうまく握れ

たら体いっぱい使って喜ぶ。いい年して恥ずかしいと思うのは、ひとしきりはしゃいで楽しんだあとである。

理性と感情、知識が一致しないのは、なんだか変な感じだった。

私がおぼつかないながら歩けるようになった頃、ひとりの女性が部屋を訪ねてきた。高そうなドレスを着て、手にふわふわのセンスを持っていた。こちらを蔑んだ目で一瞥して、そのまま出ていった。一瞬母親かと思ったけれど、その態度ですぐに違うと分かった。

そう、私は母親の顔を知らない。お腹の中にいた時語りかけてくれた声は母のものだったと思う。でもその声すら臆気で、思い出すとするほどわからなくなってしまう。父に至っては存在すら知らない。

普段は数人が交代でお世話をしてきている。みんな同じ服を着ていたからメイドや使用人だと思う。

その女性が部屋に来た日から、いつもひとりはずばにいた人たちが居なくなつた。朝昼夜の食事の時やお風呂など、最低限の世話をするとき以外に人がこなくなつた。いつも話しかけながらお世話してくれていた人たちは見当たらず、新しく来た人たちは一言もしやべらず、ただ淡々とすべきことをして足早に出ていくようになった。最初こそ戸惑い、不安や不満をぶつけるように泣いて、彼女たちに手を伸ばしたりもしたが、その手を取る人はいなかった。部屋から出されることもなく、ほとんど放って置かれていた。そんな環境で、あれほど体中に渦巻いていた感情　つらい、こわい、どうして？さみしい　は徐々に薄れていった。

私は一人で歩く練習をして、読めもしない本を眺め、開けようにも届かない窓から外を眺めて過ごした。誰もいない部屋で、小さな声で日本語の歌を歌う。そうでもしないと、声の出し方を忘れてしまいそうだった。

？前世へかこゝと現世へみらい（後書き）

2011・10・21 投稿

2011・10・23 修正

？森にて

寒気がして目が覚めた。横になった体の下の方から、湿った感触がする。暖かいベッドで寝たはずなのだけど、この冷たさはどこから来ているのだろうか。ゆっくりと睡眠状態から覚醒していく中でぼんやりと思う。辺りはまだ暗い。風が通り抜ける微かな音と、穏やかな鳥の声がする。多分梟だろう。

まだ起きるには早いようだ。反対側を向くように体を回して、寒さを誤魔化すように口元まで潜る。さあもう一眠り、と体制を整えたところで、湿った土の臭いが鼻を突いた。冷たい、くせのある水の臭いもする。

なんの匂いだったかなあ・・・そうだ、あれに似ている。雪の、融けた・・・ゆきのとけた？

そこで一気に覚醒した。室内でそんな匂いするはずがない。起き上がるうとして、失敗して転がった。なぜか毛布がいつもより体にまとわりついていて、起き上がれなかったのだ。少しの間毛布と格闘して、隙間を抜け出した時には、すっかり疲れはてていた。

どうやら寝ていたところをそのまま毛布でグルグル巻きにして運ばれたようで、パジャマのままだった。パジャマだけだと寒いのでもう一度毛布にくるまる。土の上に直に置かれていたので少し湿っているが、ないよりはましだ。

すぐそばにあった木に背中をあずけるように座り、辺りを見渡す。朝はまだ遠いようで、周りはよく見えない。でも多分、森とか山中だと思う。

私はきつと捨てられたんだろう。他に理由がない。あんな環境で、好きで世話をしているわけじゃないというのは十分すぎるくらい分かっていった。それでも、こんないきなり捨てられるなんて、思ってもいなかった。それも夜中に、誰もいないところに生活能力のない子を放置していくなんて、死んでくれと言っているようなものだ。

あの場所に未練は欠片もないし、離れられたことはむしろ嬉しいことだとも感じている。それはいいのだがこれはない。あの部屋は子供部屋にしては広かった。でもとても狭い世界だった。私はなにも知らない。言葉もわからず、誰ともまともな会話をしていないのだから当然ではあるのだが、両親のことも家のことも、自分の名前すら知ることにはなかった。でも正直、どうでもいいと思っている。

必要なのはこれからのことで、今までのことじゃない。

日本なら子供でもなんとかなった。でもここは日本じゃない。私の知っている世界でもないと思う。昔のヨーロッパのような服装は、前世から引き継いだ常識が通用しないことを証明している。運が悪ければ、売られたり殺されたりもありそうだ。それだけは避けたい。

できるだけ優しそうな人を探して、保護してもらおう。言葉がわからなくても、捨て子と判断してそれなりの施設に連れていってもらえるはずだ。そのために、人がいるところを探さなければ。取り敢えず、朝になって、辺りが明るくなったら。全てはそれからだ。

？森にて（後書き）

ほのぼの連載を書くはずなのに暗くなっていく不思議。

2011・10・25 投稿

? 出会いました

夜明けはすぐに訪れた。周りの景色がはつきりしてきたと思っただら、あつと言う間に明るくなった。やっぱりここは森の中らしい。木がたくさん生えていて、ところどころに大きな白い汚れた箇所がある。私のすぐ右隣にもあった。溶け残った雪が、散らばっているのだ。雪の上には少し凹んだ跡が残っていた。多分、この上に私が転がっていたのだろう。其の周りには大人のものと思われる足跡も残っていた。

私をここに放置した人間のモノに違いない。この跡をたどることができれば、森の出口まではいけるはずだ。

一旦毛布を脱いで立ち上がって、その足跡を調べると、真っ直ぐに歩いていたのが見て取れる。ごちゃごちゃしていないし、私を運んだのは一人だけだったんだろう。これなら、ある程度は辿っていけそうだ。雪が溶けてあとが消えてしまう前に、森から出てしまいたい。

あつと言う間に冷えてしまった体に、毛布を再び巻きつけた。今度は動きやすいように、立って歩いても引き摺らないように。大きすぎる毛布は置いていきたいけれど、自分の格好と気温を考えると、どうしても置いていけない。日中はまだ我慢出来るかもしれないが、一回でも野宿すれば、多分凍死する。

巻いてはほどいて、開いてはたたんでを繰り返して、どうにか毛布を巻きつけることに成功した時には、息もすっかりあがってしまった。幼児で、しかもろくに運動もしていなかったのだから、体力がないのも当然だ。毛布は多少引きずってしまうが、これ以上もたもたしていると時間もかかるし歩く体力すらなくなってしまっそうだ。

靴下すら履いていない足は冷たかったが、それ以外は充分すぎるくらい暖かい。何度か足踏みをして毛布がずり落ちないことを確認して、漸く私は出発したのだった。

足跡を見失わないように、ずっと下をむいて歩いていく。歩き始めこそ周りも見ながら歩いていたが、すぐに前だけ向くようになった。同じような景色の中でキョロキョロしていたら、すぐにどこにいるかわからなくなってしまう。

今は足跡がわかりずらくなったときだけ顔を上げるようにして、足跡の続く先を確認したらまた下を向いている。そんなに歩いたとは思えないのに、疲れが全身にきていて、正直顔を上げているのすら辛い。

足は既に感覚がないし、毛布が地味に重くて暑い。お腹もすいていた。

もはや気力だけで歩いてしたが、雪がより多く残っている所に差し掛かり、何かが動いた気がしておもわず足が止まった。顔を上げてよく見ると、雪の上で何かが跳ねている。薄汚れた灰色の毛が生えた、猫じゃらしの先っぽに似ているが、サイズはそれよりずいぶん大きい。立ったまま体をくねくねと動かし、ぴよこぴよこはねている。

それが、沢山。

見たこともない光景に呆然としてみると、そのうちの一匹が体当たりして来た。避けることもできず、倒れた私に、さらに数匹がぶつかってくる。体に巻いた毛布のおかげであまり痛くはなかったが、それでも続けざまにぶつかられ、何がなんだかわからなかった。体は立ち上がることもできないくらいには疲れていた。体を丸めて、

目をぎゅっとなぶつて、耐えるしかなかった。
でも、その攻撃はすぐになくなった。

「・・・、？」

誰かの声が出て、体を持ち上げられる感覚。おそろおそろ目を開けると、長いマントを羽織った男の人が目の前にいる。この人が、私を持ち上げたんだ。さっきのねこじやらしもどきは、この人が倒してしまっただろうか。下を見ると、動かないで散らばっていた。

「、？」

もう一度声をかけられて、彼に視線を戻した。

何かを聞かれているのだと思う。だけど、私は黙ったままで答えられなかった。言葉を知らなくても、こうして助けて貰ったのだからお礼を言いたい。何か言おうと口を開いても、何を言えばいいのかわからなくて、結局口を閉じてしまう。

私はたしかに人を探していた。このまま一人でいても死ぬだけだと分かっていたからだ。でもいざ人にあつたら、怖かった。助けてくれたとわかつているのに、怖くてたまらなかった。

何かしゃべって、あの人たちみたいに無視されたら？言葉を知らないことで、このまま見捨てられたら？

「そう思うと、どうしても第一声が出なかった。」

「」

自然とまたうつむいてしまったときに、優しい声が聞こえた。さっきまでの問いかけるような声ではなく、断定的な響きだった。

それでもうつむいたままでしたら、ぎゅ、と抱きしめられて、頭を撫でられる感触がした。

「」

もう一度。同じことを言われたとき、体から力が抜けるのが分か

った。もう大丈夫だ、と思った。この人なら、大丈夫。

「う、うああああああん!!」

そう認識したとたん、私の口は、たやすく動いた。おまけに涙腺も決壊した。どこにそんな力が残っていたのかと言うくらいに、体全部で泣いた。

その間中ずっとだっこしたまま頭を撫でてくれる手があったから、いつまでも泣き止まなかった。

？ 出会いました（後書き）

これで一区切り。

次からは視点が変わります。

言葉がわからない設定って、すごく書きにくい。

2011・10・29 投稿

ノースガルド

アルノミア王国カナス地方ノースガルド。

一年の半分以上を雪に覆われているカナスでも、最も雪深い都市だ。石造りの壁に囲まれた狭い街で、その周囲を険しい山に囲まれ、一番近くの村まで、凸凹の道を馬車で一週間も行かねばならぬほどの辺境にある。険しい道程から旅行者もなく、強いモンスターも出ないため冒険者が他所から流れてくることもほとんどない。

来るのは商人が物好きくらいで、冬場は街道も雪で埋まり、通れなくなる。

山間に取り残された街。

イズはそんな街で育った。

十になる前に親を亡くし、周囲の人に助けられながら、一般向けの簡単なクエストを受けて生活してきた。

十五の時に冒険者登録し、十八になる現在はそのままノースガルドを拠点にして依頼をこなしている。今も十日ほど出て、昨日帰ってきたばかりである。

いつもより遅めの時間にギルドに報告のため顔を出すと、中は閑散としていてほとんど人が居なかった。ギルド兼酒場のマスターでもあるジークが一人、カウンター内で食器を磨いている。

「おう、イズ。今日はゆっくりだな。今回の報告書はお前で最後だ。だいたい昨日のうちか、朝一にもってきたぞ」

「だと思って、遅くきたんだよ。依頼報告書を確認してくれ」

磨く手を止め視線を寄越すジークに軽く手を上げて答え、カウンターに袋から出した紙を置いた。

イズが今回受けていたクエストは、ノースガルドと隣村フランをつなぐ街道沿いの雪消し任務の護衛だった。

冬の間雪で通れなくなる街道は、春になる少し前から街道を通行可能にするために雪を溶かしていく作業を開始する。しかし、街の外にはモンスターがいて、退治しながらの作業になるためなかなかかどらない。

大半の作業は街の警備隊が行うが、時間も人手もかかる作業なので、毎年ギルドで人員を募集しているのだ。

雪消し人員は一般クエストで、討伐人員は冒険者クエストで募集される。イズは当然後者で、ほとんどの冒険者が参加する春の一大行事である。

道の上にいるモンスターは全て討伐対象になるのだが、中でも一番多いのはフグマルというモンスターだ。

フグマルは雪の上のみ現れる植物系モンスターだ。三十センチくらいの細長い丸みを帯びた筒型で、全身にびっしりと柔らかい毛が生えている。モンスターといっても雪の上をぴよんぴよんとはね回りぶつかってくるだけで、攻撃力もあまりない。

それほど苦勞する相手ではないのだが、数が多い。狩っても狩っても湧いてくる。

それをひたすら倒していく仕事だった。モンスターから取れるアイテムも取れるだけとって、警備隊が街道の点検がてら隣村まで売りに行く。その金額で毎年雇用費の一部をまかっている。

「それにしても、人が少なすぎないか？」

ジークが報告書を確認している間、カウンター席に腰掛けてイズが言う。多くの人が雪消しに参加していたから、クエストを終えた

ばかりの今日は、もっと人が居てもいいはずだ。時間帯によって人数は違うが、それでも二、三人は居なければおかしい。そもそも、急なクエストが入ることもあるので、待機の冒険者が数人は必ずギルドにいるように、マスターがある程度調整しているはずである。今のようにはジーク以外に誰もいないことなど、ほとんどない。

「いや、急ぎのクエストがいくつか入ってな。昨日報告書を持ってきた奴らは全員今日の早くから護衛で王都まで。今日来た奴らはフグ豆を取りに行ってもらってる・・・イズにも頼みたいんだが、いいか？」

「いいよ。どれくらいとってくればいいんだ？」

「出来るだけ多く取ってきて欲しい。明後日の朝一で依頼人が取りに来るから、それまでに。報酬は持ってきた量によって・・・だな。」

「わかった。今の時期に大量にいるってことは、・・・買い占めか？」

フグ豆はフグマルから取れる豆だ。ひと粒はそんなに小さくなく、フグマルの殻を割ると、中からポロポロ出てくる。個体によって量は違うが、集めること自体はそんなに難しくない。

軽く茹でてそのまま食べたり、スープに入れたりと使い道の多い、ノースガルドではポピュラーな食品だ。乾燥させると長期保存もできるため、たくさん取れる冬のうちに数をとっておくのが当たり前になっていく。

毎年のことだ。今年だけ集める量を間違えるなんてある訳がない。確信を持ったイズの言葉に、ジークも眉間にシワを寄せて答える。

「そつだ。王都に帰ることになった貴族があちこちの店であるだけ全部買つていったらしい。金にモノを言わせてかなり強引に買つていったそつだ。護衛に出ていった奴らはその貴族と豆を積んだ馬車の護衛だよ」

「はた迷惑な貴族だな」

「まっただ」

この狭い街で買い占めなどしたら、普通なら悪評が立つて、たちまちいられなくなってしまう。街道が通れるようになるのを見計らつての行動だろう。

この辺ではよく食べられているが、ノースガルド周辺でしか取れないフグ豆は、他の地域では高級食材として高く売れる。手に入れるために多額のお金を使ったとしても、充分お釣りがくる。

「……とりあえず、さっさと行ってくるよ。そういう事情なら、いくらあつても足りないだろうし」

「ああ、よろしく頼んだ」

いつまでもグチグチ言つていても仕方がない。

イズは溜息をため息を一つ吐いて、ギルドを後にした。

ノースガルド（後書き）

2011・11・9 投稿

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7352x/>

異世界転生顛末記(仮)

2011年11月16日23時00分発行